

私の福島での経験とこれからのこと

311直後、長崎大学の山下俊一教授が100ミリシーベルトまで安全だと言いました。年間100ミリシーベルト放射能を浴びても安全とテレビ、新聞、ラジオ、学校、講演会で行き渡ったころ、学校で0.5マイクロシーベルト、通常値の10倍でも、外の活動を安全だとして行いました。

給食も最初、地産地消ということになり、教育委員会が給食を食べない自由を認めたのは、2学期になってからです。ですから、100ミリ安全説を信じた人の子供たちは、地産地消をして、給食を食べていました。

外の放射線量は同じではありません。たった10cm違っても、2.3マイクロ、5マイクロ、普段の46倍、100倍、と様々です。

市の職員、学校の教員は子どもを守りませんでした。**私が直接知っている学校の先生は、校庭が様々な放射線量であり、それを報告し、子どもを守ろうとしたら注意され、退職しました。**現在も子どもと長野に自主避難しています。

当時私のピアノ教室に通っていた病院の医師は家族を避難させ、自分は転勤願いを出し続けています。そんな教師や医師を複数知っています。

3月11日の大地震の被害は、私の家は殆どありません。ただ、〇市の水道が20日ほど、止まりましたので、地震の次の日、給水車に2～3時間程、子どもと一緒に、普段の460倍の放射線量、毎時23マイクロシーベルトあるのを知らずに外で並んでいました。並んでいる時も、屋内退避の広報車もなく、私達は原発が爆発したことを知らず、被曝しました。テレビで原発爆発のニュースが流れましたが、安全だと言っていたので、危険を知らず、ヨウ素剤も配られない中、放射性物質入りの水を飲み、その水で調理して食べました。

事故直後「水を飲まないように～」という指示も、ヨウ素剤も配られませんでした。

3月12日1回目の爆発。あとで〇市の測定データを見ると、23マイクロシーベルト、普段の460倍あり、知らされなかったことにショックを受けました。

日本は今も安全と言っていますが、今現在私達母子3人とも、甲状腺に異常有りの血液検査の結果と、息子には、5mmののう胞があります。報道をみると、甲状腺がんは生活習慣病になりました。

また、国民病として、2人に1人はガンになるというパンフレットを福島の郡山市は子供たちに配布しています。たとえ癌になっても自己管理のせいといわれ、放射能の影響と国は言いません。

私は、事故直後、子供たちのホールボディカウンターをすぐに受けようと思いました。しかし、どこに問い合わせても受けられませんでした。では、甲状腺の血液検査を、と思い、電話しましたが、〇市内一斉に「甲状腺の検査はしない」と、言われました。どこで被曝した証拠を残せるかと福島県に聞きましたが、「ない」と回答されました。

私の主人は〇市の職員です。何かあったら、1番に連絡があるはずだと主人は言ってました。でも結果は原発の爆発も知らされず、母子ともに外で被曝をしました。

また、私の主人(市職員)は放射能の知識は0ですが、国から与えられた文書を丸暗記し市民の放射能についての不安の声に「安全です」と回答する電話対応に追われていました。

「安全かどうか、わからないんだから、そんなこと言って良心痛まないの？」と聞きましたが、
「大丈夫と思わないとやっていけない。」と言ってました。

そのうち、夫婦の絆は消えました。

事故から7か月後、〇市発表の放射線量は0.12 μ シーベルトでした。でも、市役所から借りたガイガーカウンターで測ると、その時0.24、~22.14 μ シーベルトという様々な数字を見ました。また、有志で土壌検査や剪定した木の測定値はkgあたり20000Bq以上ありました。

国や行政は私たちを守らないと、主人の役所での言動と放射能の測定数字を見てそう感じました。

また、市役所に水道水の中に含まれるストロンチウムやプルトニウムなどの核種の測定値を見たいと文書請求すると、「市民が混乱する」という理由で詳細なデータを出さず、ヨードとセシウム ND の文書を出されました。

私が避難を考え始めたのは、放射能を怖がるというよりは、行政、学校、議員、弁護士の対応と自分の目でみた測定値と家族におこった体の異変です。

毎日続く下痢、鼻血、口内炎、鼻の中のできもの。これらは、原発事故後に家族、友人に実際おきたからだの変化です。放射能の影響は癌だけではないと知ったのも後になってからです。

国の発表と事実はちがう。国は明らかに法律違反を市民に強要しているのに、行政職員は国の言いなりにしか動きません。

文書公開制度すら、嘘にならない嘘で市民を騙し、時間をかせぎます。

学校は子どもを守らない。放射能に気をつける父母を許さない。放射能をなるべくさけようと、お弁当にすると、他のクラスメートからいじめられ、暴力をうけても、いじめた児童父母を指導せず、放射能を怖がらないように私が指導を受けました。

私が、直接避難を決意したのは、娘の登校拒否です。放射能を予防することを周りの空気が許しませんでした。

私は、それでも、両親と離れたくなかったので、ここで暮らせる方法をたくさん探しました。年老いた両親と離れるのは辛い、一緒に避難をしようと説得しましたが、今更ふるさとから離れられない。と言われ、夫は安全論。夫の母には、「立場をわきまなさい」と自分は娘と孫と岩手にいるのに、私達母子は避難することを許してもらえませんでした。

結局、家族、行政と格闘しながら、悩み、私の両親から子どもを1番に考えなさいと言われて、夫を捨て、年老いた両親を福島に残し、北九州に避難しました。

311からあつという間に2年が経ち、福島から人を避難させるのではなく、放射能を「絆」で拡散させることを国民に選ばせました。「福島に住み続けたい」と福島県民に言わせて、福島は安全、福島を除染して福島復興という空気を最初は福島県の中から、続いてガレキ処理をきっかけに全国でつくられてしまいました。また、放射能に不安を抱いていた人々に対しては、保証をしないことで、病気になっても泣き寝入り、死んでも仕方がない、逃げても生活ができないという空気が生まれました。こんな苦悩を知らない方々、環境省の前で話す私たちに向けられた環境省職員の冷ややかな視線。人々の頭の中に、福島の現実、こういう親子の存在すら関心が無いようです。

福島に人を閉じ込めるエートス活動成功です。保養も、食べて応援も、除染も私個人はエートス活動だと感じています。なぜなら、事実と向き合えば、答えは一つなのに、保証もせず、事実もリスクも伝えない状況で、選ばせ、放射性物質を永遠に焼却し、リサイクルさせることを国民に選ばせてしまいました。生活排水は高濃度の下水汚泥になり、汚泥や除染した土は焼却され、セメントなどに変わり、すべて自分に帰って来ますが、この現実と向き合うことはありません。

そんな中、放射能が低いはずの、安全なはずのいわき市に住む私の友人の甥が先日、白血病と診断されました。元気だった従兄弟が突然死した次の日、友人も突然、死にました。311前は知り合いがこんなに死ぬことはなかったのですが・・・

何でも放射能のせいとは言いません。ただ**チェルノブイリの教訓があります。**

原発事故がおこると、国は事実を隠し、地方の行政職員は知識がないので国の言いなりになり、勿論、全てではありませんが、政治家や様々な宗教、NPO、いろいろな団体が一致団結して、無知な国民を誘導し、それを、企業や国がバックアップしているのでしょうか・・・

今は、311後日本全国で急性症状の出ない放射性物質の焼却処理実験がもう2年も行われてしまった事実を冷静に受け止めています。更に、先日爆発した鮫川村の実験焼却炉で形だけの報告のあと、全国で放射性物質を使ったバイオマス発電、放射性物質の

焼却炉建設が始まることでしょう。福島では建設されてしまいました。危険性に気づいている人はとても少ないです。

今後も、これまでと同じようにメディアは国民を教育する報道をし続けることでしょう。私達が、自分で考え、自分で動くことはこれからもないからです。

今、海外へ逃げるといっても、汚染はなくなりません。ここ九州に放射能が追いかけて来たように、人々の意識が変わらない限り、海外もまた同じです。北九州市の環境ビジネス・日本人を騙してきた手法を使って、東南アジアの人たちも騙していくのでしょうか

311前に見えていた子ども達の未来が、見せかけの自由、見せかけの平和、だったのです。

最後に、「原発事故を経験した今でも、私たちが選んだのは生活スタイルを変えずに電気を使い、廃棄物を排出し続ける道でした。原発がなくなっても、人々の生活スタイルや考え方が変わらなかったら、原発が別の何かになるだけです。例えば、太陽光パネルを今CMで押してます。20年で寿命がきたあとは、廃棄物になります。その処理はどうするのでしょうか・・・人が住む場所で処理をするのです。原発も人が住む場所にあります。私たちはエネルギーをどうするかではなく、生活を見直し、考え方を換え、生き方に真剣に向き合う勇氣を持たらと思います。本当は、福島に、おうちに帰りたいです。お父さん、お母さん、友人たちに会いたいです。でも、この国は放射能を拡散し、多くの人々がそれを受け入れ、放射能を受け入れた福島復興に動いています。私には全く理解できません。」

私は、分断を恐れなくて、事実と向き合える方々との事実の共有を、今、本当に望んでいます。

もう、殆ど諦めて、体も、心もぼろぼろですが、もう少しだけ未来に、人間に期待したいです。

北Qの子どもを守るねっとわーく